

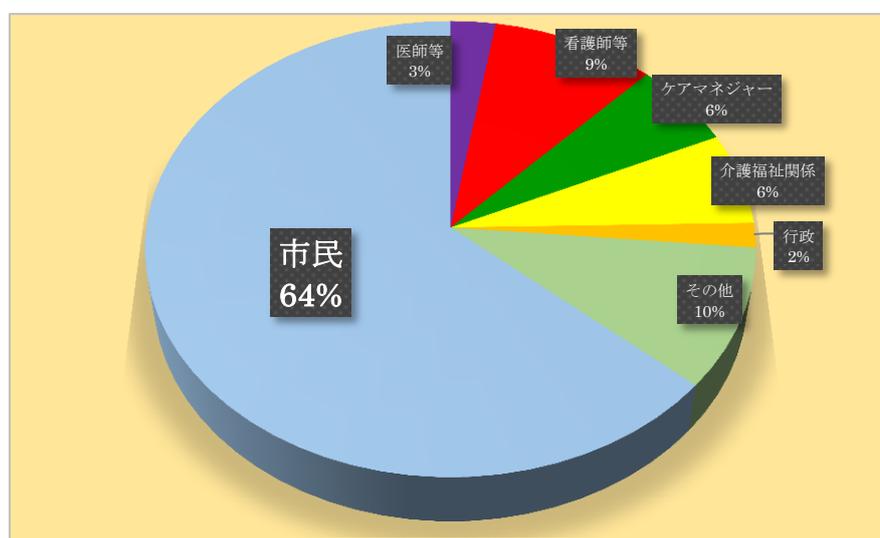
地域住民のための福岡東在宅療養シンポジウム 2017

やっぱり家が一番よか～自分らしく暮らすヒ・ケ・ツ～

福岡東在宅ケアネットワーク世話人 医療法人あおばクリニック

伊藤大樹

「第5回地域住民のための福岡東在宅療養シンポジウム」が、2017年11月12日(日曜日)に福岡リーセントホテル・2F レインボーホールで開催された。テーマは「やっぱり家が一番よか～自分らしく暮らすヒ・ケ・ツ～」であった。第1回は2012年で、吉永小百合と笑福亭鶴瓶の映画「終わりよければすべてよし」とシンポジウム「今この地域でできること」を福岡東在宅ケアネットワークが単独で開催した。2014年からは福岡市東在宅ケアネットワーク、福岡市東区保健福祉センター、東区医師会の3団体が主催し、在宅医療・介護をテーマとしている。今年は3団体主催となって4回目のシンポジウムで、昨年の参加者数220名を上回る231名(うち一般147名)の参加があった。



(図) 参加者の割合

このシンポジウムの特徴は「3団体主催」、「多職種協働」、「手作り」の3点である。多職種で構成する民間の在宅ケアネットワークの活動を行政と医師会がサポート

するかたちは、ありそうでない全国でも珍しいスタイルである。また、東区歯科医師会、東区介護支援専門員連絡会、東区訪問看護ステーション連絡協議会、福岡県医療ソーシャルワーカー協会、東区小規模多機能連絡会と多くの職能団体がシンポジウムを共催した。

シンポジウムの内容は「介護保険 SHOW 百科」、「劇団いっちゃん座公演：住み慣れたわが家でさいごまで」の2部構成で、「介護保険 SHOW 百科」はコントの中で介護保険の基礎知識を会場の参加者におもしろおかしく問いかけるものである。観客参加型の Q&A で例年の体験談に代わる新たな試みであったが、大変好評であった。劇団いっちゃん座公演は4回目を迎え、シンポジウムのメインイベントである。「劇団いっちゃん座」は2014年に結成され、劇団員は福岡東在宅ケアネットワーク会員で構成されている。寸劇では重篤な疾患と障がいを持ちながらも自宅で独居生活の継続を希望した男性患者の思い、そして家族間の葛藤が描かれている。涙あり、笑いありの劇であった。ホール外には訪問診療、訪問歯科、訪問薬剤、訪問看護、小規模多機能居宅介護、福祉用具、認知症ケア・ユマニチュード®を紹介するブースを設置した。

地域包括ケアシステムでは、患者さんの状態に応じた療養場所や包括的サービスの提供が行われる。そこでは在宅医療は選択肢の1つであり、選択には患者さん自身の意思決定や覚悟が必要である。困難な状況の中で個人が行った意思決定や覚悟は、本人以外にとっては「我が儘」と思われることも多いであろう。そして、この「我が儘」(＝患者意思決定＝本人の覚悟)こそがサブタイトルにある「自分らしく暮らすヒ・ケ・ツ」なのだと訴え、シンポジウムを閉会した。(福岡市医師会報平成30年新年号に転載)